

ODAを活用した 中小企業海外展開のススメ(下)

前月号では、ODAを活用した海外展開について、JICAの「中小企業支援スキーム」と、外務省が2012年度から開始した相手国に資金を供与し日本の中小企業の製品に限って購入できる「無償資金協力」について紹介した。

今月号では、「中小企業支援スキーム」を活用した県内企業のうち「普及・実証・ビジネス化事業」まで実施した2社の取り組みについて直接ご担当者にお話を伺ったのでご紹介したい。

喜多機械産業株式会社

同社は、2013年10月～16年7月までの期間で、四国電力株式会社と東京のコンサルタント株式会社アンジェロセックをパートナーとして、フィリピンミンドロ島で小水力発電事業を実施した。

JICAが我が国中小企業の海外展開を支援する業務を開始したのは2012年である。同社の採択公示は2013年度なので、ごく初期から取り組んでおり、「案件化調査」は実施していない。

さて、フィリピンミンドロ島は、日本人旅行者も多く訪れる滝で有名な観光地であ

る。フィリピンの開発課題の一つとして未電化村落の解消があげられているが、島嶼部が多いことや山岳地帯が多いことから世帯電化率は2017年で76%にとどまっている。こうした課題解決のため、同社では小水力水車発電機と小規模飲料水浄化システム、LED照明、電動三輪タクシーを組み合わせたオフグリッド電力供給システムをJICAに提案し採択された。期待される効果としては、滝をライトアップすることで夜間営業が可能となり、観光客の増加が見込め地元収入向上につながるし、安全安心にも貢献できる。また、安全な水の供給と環境配慮型の充電ステーションも設置できる。

実証事業の結果、すでにフィリピンで多く流通しているインド製の水車発電機に比べ、高価となるためコスト低減が課題となるものの、複数のコンポーネントを小型水力発電場所に応じて柔軟に組み合わ



小水力発電機



滝からの送水管と喜多機械産業のスタッフ

せることができるなど、ニーズに応じた設置が可能であり、同国内には潜在的な需要が多数存在し、情報収集次第でビジネス展開できることも判った。

同社開発営業部の子隅孝彦副部長は、「人口減少という地域課題解決の処方箋は実は途上国にこそあるのではないかと。ならば海外で実績を積んで徳島帰郷して徳島を元気にしたい」との思いからJICA事業を草創期から活用した」と語る。

フィリピンでの実績が認められ、日本国際協力システム(JICS)が途上国政府に代わって調達する無償資金協力にも採用された。2015年にはミャンマーの山間部で滝の水を引き込む水路を建設し低落差型水力発電機2機を取り付け2つの村に電力を供給した。2018年には同じくJICSの調達で中米エルサルバドルの3大学に教材用にアレンジした小水力発電機を納入した。

さらに、本年7月には、国連専門機関の一つである「国際連合工業開発機関(UN

IDO)東京投資・技術移転促進事務所(東京事務所)」のSTePP(サステナブル技術普及プラットフォーム)に同社の「小水力発電システム全体の設計手法・施工手法」が登録され、海外からいつでも同社の技術が閲覧できるようになった。

子隅副部長は「JICAの看板は見知らぬ海外での信用力が高く仕事が進めやすい」と指摘する。そして海外展開を図りたいと考えている企業へのメッセージとして「やりたい気持ちがあれば手伝ってくれる人は必ず出てくる。それと自社の利益も大事だが、自社の技術で途上国を支援して現地が豊かになることを願う強い気持ち、いわばミッションを感じて動くことが大事」と強調する。

北島酸素株式会社

同社は、北島ROCシステムと呼ばれる高度な医療用酸素供給システムを構築しており、県内医療用酸素流通販売量の約8割のシェアを占めている。この強みを活かして途上国の医療水準向上に貢献するため、2017年7月～20年5月までの期間で、東京のコンサルタントインテックコンサルティング株式会社をパートナーとしてミャンマーで医療用酸素を高品質・衛生

的かつ安定的に供給する実証事業を行っている。

同社では、ミャンマーにゆかりの人のつながりもあり、2013年から現地でガス全般について調査を実施し、1年間観察した結果、「医療用酸素ならいける」との認識が役員の中で形成されたという。そして、2015年10月～16年9月に実施した「案件化調査」では、ミャンマー国内の国公立病院と民間病院約40件を調査したところ北島ROCシステムの導入が有効であることを確認し、すぐさま「普及・実証・ビジネス化事業」に提案、採択された。

同社国際事業部の小西優輔プロジェクトマネージャーは「すでに海外メジャーが進出しているタイやベトナムでは中小企業の進出余地は少ないが、大手では真似できないきめ細かな対応を強みとしている北島ROCシステムならミャンマーで貢献できる」と自信を見せる。現在、ミャンマーでは医療用酸素の規格などが整備されておらず、日本以外の規格による法整備が行われる前に日本規格をミャンマーに投入できれば、海外企業との競争優位が維持でき、他の日本企業の同国でのガス関連事業参入の道筋も付く。そこで現在同社では医療用酸素の全国版マニュアル及び基

準案の作成をミャンマー保健省と取り組んでいる。

小西マネージャーもまた、JICA事業のメリットを「日本国政府の信用を背に仕事をできることだ」という。また、「現地への貢献が第一でありミッションを常に意識することが現地で認められることに直結する。



国立病院での医療ガス安全講習会



国立病院で医療用酸素の日常点検を教育する様子

北島ROCシステムをミャンマーに適した形で導入し、現地の医療レベル向上に貢献できるよう精進していく」と語る。そして「海外にだけ目を向けているわけではない。徳島の祖業をしっかりやるのが一番大事だと考えている」と話す。

以上2社に共通するのは、①JICA事業に採択されたことで海外での仕事は進めやすかったこと、②自社の利益は大事であるが、徳島で磨いてきた技術で途上国の発展に寄与したいという強い思いがあること、③海外で貢献することで徳島を元気にしたいという思いを持っていること、である。

当機構では、徳島ビジネスチャレンジメッセにおいて10月10日(木)午後、「海外展開セミナー」を開催し、喜多機械産業株式会社のご担当者にご講演をお願いしている。また、今回は日程の都合で叶わなかったが、北島酸素株式会社のご担当者からも海外でのご経験を聞く機会を設けたいと考えている。

海外でのハンズオン経験をお聞きいただきぜひ海外展開挑戦のヒントとしてほしい。



現地の配送スタッフへ安全配送を指導中



タマラウ滝に設置した飲料水システム



笑顔で写真撮影に応じてくれたミャンマーの子どもたち